「現実的なもの」の原景
――ジャック・ラカンによるフロイト『心理学草案』読解

荒谷大輔

0．はじめに

ラカンにおける「現実的なもの」という概念は、容易に捉えがたいものとして知られている。「現実的なもの」は、たとえば、常に「意味」の外側にあり、語ることができない［cf. S.VII, 67］。「現実的なもの」は、認識不可能であり、かつて一度も、そしてこの先にも決して、意識に上らないものとされる。「現実的なもの」がそのように、あらゆる概念把握の外側にあるものだとすれば、われわれはどのようにしてそれについて語りうるのだろう。ラカンはしかし他方で、その「語りえない」はずの「現実的なもの」について、明確な特徴づけを行ってもいる。「現実的なもの」は「常にそこにあり続けるもの」であり［cf. S.IV, 38］、また「現実的なもの」に関わっていることが、精神分析が観念論ではないことの根拠ともされている［cf. S.XI, 53］。だが、語りえないはずの「現実的なもの」について、なぜ精神分析だけがそれについて語る特権的な立場に立ちうるのだろうか。そのような語りがいかなる権利において可能になるかがそこでは問われることになるだろう。精神分析が単なるひとつの「独断」に留まるものではないとすれば、語りえないはずの「現実的なもの」を語り出す理論的な可能性を明確にする必要がある。

本稿では、精神分析の理論においてもしばしば曖昧な位置づけのまま用いられる「現実的なもの」の存在様態を、ラカンのテクストに即して明示化することを目的とする。ラカンにおける「現実的なもの」の概念は、単に表象可能性の外にあるだけで、明確な理論化可能性に開かれたものであることが明らかになるはずである。

1．フロイト「心理学草案」における「現実の痕跡」

ラカンは「現実的なもの」についてのまとまった論述を展開したセミネール七巻において、最初期のフロイトによる「心理学草案」を参照し、そこに「現実的なもの」の存在様態をみてとっている。

「心理学草案」は、フロイトが『夢解釈』を出版し精神分析の立場を確立する前に書かれたもので、神経生理学をモデルに人間の精神構造を記述しようとする野心的な試みであった。そこで素描された「心的装置」のモデルは、その後の精神分析の理論を方向づけるものとなっている。フロイトは当時最先端であった神経生理学を援用しながら、人間の精神を神経細胞間のエネルギー伝播のシステムとみなした。そうすることでフロイトは、「意識」と呼ばれるものを心的装置にとって単に付加的なものと見なし、意識されない領域の事柄について語る理論的な基礎を獲得しようとしたのである［cf. Freud:GW-Nb,

二〇一五年一一月三十日受付
＊江戸川大学 人間心理学科教授　哲学、倫理学

400f.]。「意識とは、それが脱落しても心的過程には何ら変化を生まないもの」[Freud:GW-Nb, 404] である。「意識」の外において機能する神経システムの構造を「機械論的」に記述しようとするフロイトの「心理学草稿」は、「無意識」をめぐる精神分析の理論の原型となっているのだ。

ラカンは、このフロイトのテクストをほとんど忠実に辿り直すことで、「現実的なもの」の存在様態を示している。以下、適宜フロイトの論述に立ち返りながら、「現実的なもの」についてのラカンの論述を見ていくことにしたい。

心的装置の「記憶」：ψシステム

フロイトは外的世界からの刺激に対応した心的装置を、特定のエネルギー量が神経ネットワークを通って流れるものと考えた。記憶とは、たとえばこのフロイトのモデルによれば、複合化した神経ネットワーク全体を示すものであり [cf. Freud:GW-Nb,456]、「Q̓」と記述される量がどのような道筋（この道筋のことをフロイトは「通道(Bahnung)」と呼んだ）を通るかということで「何」が想起されているかが現される。心的装置の機能を可能な限り量の問題として記述することでフロイトは、精神構造の「科学的」な記述を目指したのである。

フロイトによれば心的装置は基本的に、外部から受けた刺激によって侵入してきたエネルギー量をできるだけ速やかに放散させ、興奮状態を沈静化させようとするとされる。それゆえ、心的装置を構成するニューロンとしてまず想定されるのは、外部から受けた刺激に応じて発生したエネルギーをそのまま通過させるような透過的なニューロン（「φニューロン」と呼ばれる）となる [cf. Freud:GW-Nb, 393]。だが、心的装置は単に刺激を受け流すものではなく、そこで得られた情報を蓄積して自らの欲求を満たそうとするものと考えられる。フロイトが「生の困窮（Not des Lebens）」と呼んだものは、心的装置内部で発生するそのような欲求なのであった。すなわち、興奮状態を可能な限り沈静化させるという目的のためには、すべてのエネルギーを放散させた方が望ましいはず（「慣性の法則」）だが、「生の困窮」と呼ばれる条件下において心的装置は、一部のエネルギー（Q̓）を内部に保持し、自らの作用でエネルギーを制御しようとする [cf. Freud:GW-Nb, 389f.]。それゆえ、エネルギーを「備給」するニューロンとして、透過な「φニューロン」とは別に「非透過」な「ψニューロン」を導入する必要があることになる [cf. Freud:GW-Nb, 391]。接触障壁によって隔てられたψニューロンの結合を考えることで、心的装置の「主体性」が成立するのだ。ψニューロンの結合構造を「主体のトポロジー」とラカンが語るのは、こうしたフロイトの議論を踏まえたものと考えられる [cf. S.VII, 51]。

ψニューロンは「接触障壁」によって結合しているが、その「非透過率」は外的刺激によって発生する同種のエネルギーの重複によって減じ、次第に透過性を上げていくとされる。だとすれば、心的装置の「記憶」とは、特定のψニューロン間の接触障壁の非透過率が減じて、特定の刺激に対応する特定のエネルギーの流れの道筋が定着することによって表現されることになるだろう [cf.Freud:GW-Nb, 392f.]。こうして形成されるエネルギーの流れの道筋のことをフロイトは「通道」と呼んだ。通道の形成は、Q̓ の流れの量と回数に依存するが [cf. Freud:GW-Nb, 393]、Q̓ の通過の後、通道にはQ̓ の「何分の一か」のごく少ないエネルギー量が残されるといわれる [cf. Freud:GWNb,394]。ψニューロンに流れるエネルギーQ̓ 自体、量としてはφニューロンに流れるエネルギー量の「商」[Freud:GW-Nb, 398]、すなわち抵抗値で割った値にすぎないが「通道」に備給され続ける量はそれよりもさらに少ない値とされるのである。

こうしてψニューロンは、最初に流れ込むQ̓ 量に応じた複合化に

よって［cf.Freud:GW-Nb, 407f.］、そして外的刺激の変化の「同時性」に応じた「連合」によって、組織化されることになる［cf.Freud:GW-Nb, 411f.］。とりわけ後者の「連合」は、「ψニューロン間のあらゆる結合の基礎」［ibid.］といわれ、記憶の組織化の重要な要素とされている。「連合」とは、古くはヒュームが、そしてフロイトの時代には連合心理学が知覚の基礎とした概念であるが、ヒュームにおける連合が外的経験の継起を記録する「記憶」とは区別された「想像」による観念の結合の法則とみなされていたのに対して［cf. Hume,11f.］、フロイトが「記憶」を構成する原理と見なしていることは注意しておいていいだろう。後に詳しくみるように、最初の通道によって刻み込まれた「記憶」は、フロイトにおいて、事後的に機能するいかなる思考の作用によっても変化を蒙らず残り続けるものとされるのである［cf. Freud:GW-Nb, 430］。

「意識」と「自我」：無意識的な「思考」

さて、このようなモデルによって構成された心的装置は、純粋に「機械論的」に記述されうるものであり、主体がその過程をどのように「意識」しているかとは無関係に機能する。我々に「意識」されるのは、エネルギー量の変遷ではなく、それに伴って生起する何らかの「質」の感覚である。フロイトはψニューロンの備給に伴って生起し、質的な感覚を呈するような「ωニューロン」を別に措定し、「意識」をそれが脱落しても心的装置に何らの変化も生まないものとして示したのである［cf.Freud:GWNb,404］。こうした「質」の意識はそれ自体、「保存もされず、痕跡も残さず、再生もされない」［Freud:GW-Nb, 403］。心的装置を「意識」の外で機能するものと見なすことでフロイトは「無意識」の領域について、その構造を語る視点を確保するのである。

フロイトはここから心的装置における「自我」と呼ばれる構造を語り出す［cf.Freud:GW-Nb, 416ff.］。「自我」とは、フロイトによれば、心的装置において「不快」なエネルギー量の流れを制御するための機能である。「不快」とは、放散されない「Qη の亢進」である［cf. Freud:GW-Nb, 404］が、「自我」はそのエネルギーの過多を回避するために組織されるといわれる。「自我」は、すでに形成されている特定の通道へのエネルギーの流入を避けるために「側方備給」と呼ばれる仕方で介入し、別なψニューロンへと「接触障壁が一時的に通道されたような効果をもたらす」［Freud:GW-Nb,416］。「制止」と呼ばれる「側方備給」の機能を組織化することで、「自我」は「不快」が発生しない状態を維持しようとするのである。

ここでフロイトが語っている「自我」の機能が、なお「意識」とは直接関係づけられるものではないことに注意をしよう。フロイトにおける「自我」は、自らがそのような機制を働かせてエネルギーの流れを制御しているということの「意識」とはさしあたり無関係に機能しているのである。ラカンはこの点に着目し「自我」の機能を「無意識の水準で」機能するものとみなす［cf.S.VII, 64］。心的装置における「自我」の機能は、主体がそれを意識することないままに作動するものだとラカンはいうのである。

ラカンによれば、フロイトが「制止」の機能の延長に示す「思考」においても、同様の無意識性が維持されているとされる。「思考」とはフロイトによれば、たとえば幼児が乳房の側面からの写像を見た時に、かつて「連合」によって獲得された乳房の正面からの映像を思い描き、彼の欲求の満足をもとめて、今与えられている知覚から辿って実際に乳房という対象を再認しようとする過程として語られる［cf. Freud:GW-Nb,423f.］。そこでは、ある知覚によって備給されたψニューロンの系列（乳房の側面からの写像）が、内的な要因によって備給されたψニューロンの系列（欲望備給）を引き起こし、欲望の充足

をもとめた幼児の実際の運動を介して、対象の再認が行われている。すなわち、知覚備給と欲望備給の差異が、知覚によって得られた情報を「乳房である」と「判断」させる動因となっているとフロイトはいうのである。「AはBである」という「判断」を積み重ねていき、経験を重層化していくこと、これがフロイトのいう「思考」にほかならない。「思考過程は、フロイトが記述しているように、それ自体、本性的に無意識的なのです」[S.VII, 41]。ラカンはフロイトにおける「思考過程」をもまた、本性的に「意識」とは独立に語りうるものとみなし、そこからフロイトのテクストの潜在的な可能性を引き出そうとするのである(1)。

言語連合

フロイトによれば「思考」は、「そうした〔再認におけるψニューロンの〕備給を正しいところへ導く」ために「言語連合」と呼ばれる機制を用いるようになる[cf. Freud:GW-Nb, 455]。外的刺激を「記憶」する際に適用された「連合」の法則とは異なる「言語連合」を用いて「思考」は、より「正しい」認識を目指そうとする。ψニューロンに流れるエネルギー量の布置が「記憶」を形成しているのだとすれば、その「記憶」が「言語連合」に従っていることは明らかである。ヒュームがその認識論の基礎に据えたように、諸観念の間の連合は、単に外的刺激の「同時性」に依存するだけのものではなく、むしろ、精神の作用によって特定の構造をもって独立に秩序化される。だとすれば、フロイトの心的装置における「思考」もまた、外的刺激の「記憶」によって形成される通道とは別に、「言語連合」に即した「通道」を自らの作用によって形成しうるものと考える必要があることになるだろう。「ここで我々が気づくのは、自我自身が同じようにψニューロンに備給を行い、経過を喚起し、この経過を痕跡として間違いなく通道を残すに違いないということである」[Freud:GW-Nb, 456]。「思考」は、外的刺激の同時性によって刻み込まれた最初の「通道」とは別に、自らの作用によってψニューロン間の通道を形成することができるとフロイトはいうのである。

一次過程と二次過程

だが、そうして「思考」によって新たに形成される「通道」は、最初に作られた「通道」に上書きされ、もとの痕跡を消してしまうものではない。「思考は、一次過程によって作り出された通道を本質的には変化させてはならないのであって、そうでなければ現実の痕跡を偽造してしまうことになろう」[Freud:GW-Nb, 430]。「現実記憶はそれに関するいかなる思考によっても変容を蒙ってはならない」[Freud:GW-Nb, 468]。フロイトによれば、「思考が残す通道はすべて高い水準で初めて作り出されるもの」[Freud:GWNb,469]であり、「一次過程」における最初の「現実記憶」は、いかなる変容も蒙らずに、そのまま残されるといわれるのである。

このように心的装置における一次過程と二次過程を区別することによってフロイトは、自らの意識の外で身体的な症状を呈するヒステリーなどの精神疾患の構造を説明できることになる。「自我」の制御の外で意識されないままに残る「現実の痕跡」が、「自我」の「制止」が外れた状態において、様々な「症状」を呈すると理解されるのである。こうして記述される最初期のフロイトの心的装置のモデルが、後の精神分析の理論構成の原型となっていることは、もはや容易に理解されるだろう。「思考」は、一次過程におけるエネルギーの流れを「抑圧」し、「現実原則」に照らして不都合な「連合」の想起を遮断するとされるのだ。

ラカンはしかし、このような「言語連合」によって新たに「通道」を作っていく「思考」の作用自体を「意識」の外で機能するものと見なす。ラカンにおいて「思考」は、それ自身が無意識なものとみなさ

れる。このように考えることでラカンが、無意識の領域の内部に領域の差異を導入するに至っていることに注目すべきであろう。最初の経験によって刻み込まれる「現実の痕跡」と「思考の痕跡」[Freud:GW-Nb, 430] は、ともに意識されないものの領域で「抑圧」を蒙るものでありながら、なお区別されるものと見なされるのである。

「原抑圧」と「抑圧」

では、ラカンのフロイト解釈において「現実の痕跡」と「思考の痕跡」を分かつのは、いったい何なのか。ラカンはここで、後にフロイトの理論に導入される「原抑圧」の概念を読み込むことになる。すなわち、「現実の痕跡」は、無意識のうちに「言語連合」によって上書きされることで「原抑圧」を蒙り、「原抑圧」を蒙ったものは、無意識における「抑圧」の機能が低下した際も決して意識化されないものとみなされるのである。このような無意識において機能する「思考」の機能によって想起の外におかれるものの機能を、ラカンは「表象代理」という概念を用いることによって説明する。表象代理とは、フロイトが「原抑圧」概念を設定する際に用いたものなのであった。「そこでわれわれは、原抑圧というものを仮定しておく根拠を持つことになる。原抑圧は抑圧の最初の相期であって、それは、心的な（表象の）代表が、意識的なものの中へと受け入れられることが不首尾に終わるということに存している」[Freud:GW10, 250]。フロイトは、原抑圧という概念を「心的な表象の代理」を拒否するものとして設定しているのである。

「心的な表象の代理」とは、フロイトにおいて、「欲動」と呼ばれる「身体内部に発し心の内へと達する刺激を心的に代表するもの」[Freud:GW,214] とされる。「欲動は，心的なものと身体的なものとの境界概念」[ibid.] であるが、身体的なものが心的なものとして表現される際に、それを代理するものといわれるのである。それゆえラカンは、表象代理は身体的な刺激を「代理」するものであって「表象」とは区別されるものといわれることになるのだ [cf. S.VII, 75f.et 121]。

原抑圧が問題になる場面で語られる「表象代理」という概念をラカンは草案の読解に読み込んでいる。「後の〔フロイトの理論の〕進展を見ると、この〔草案の中で語られた〕「Ψ」はすでに「表象代理」の機能によって支配されていることがわかります」[S.VII, 121]。「それは快楽原則にしたがって「諸表象」への備給を制御している思考過程であり、無意識が組織化される構造〔中略〕です。〔中略〕この構造はシニフィアンと同じ構造を持っているのです」[S.VII,75f.]。ここでラカンは、言語と同じ構造によってΨシステムを構造化する「思考過程」を表象代理との関係で語っている。無意識的な「思考」による「現実の痕跡」の上書きを、ラカンはここで「原抑圧」との関係で語っているのである。

「無意識はそれ自身、言語（ランガージュ）として構造化されている」というラカンの有名な定式は、こうした観点からも再度確認される。セミネール内で心理学草案のレジュメを担当したポンタリスは、フロイトの草案の記述がラカンの定式の反証になっているのではないかと疑問を呈していた [cf. S.VII, 56]。「現実の痕跡」が「言語連合」による「思考の痕跡」によって抑圧されるのだとすれば、無意識に言語的な構造を見るラカンの主張は、少なくともフロイトの読解として誤っていることになるのではないか。ラカンはしかし、フロイトにおける原抑圧と抑圧の差異を読み込むことで、無意識における「象徴的なもの」の機能と「現実的なもの」の領域の存在を同時に示すことになった。ラカンにおける「現実的なもの」とは、意識されないがゆえに単に「独断的」に語られるものではなく、心的装置をめぐるフロイトの理論に準じて語られるものだったのである。

こうして我々は、いまやラカンにおいてしばしば謎めいた仕方で語

られるに留まる「現実的なもの」の概念を理解するための広いパースペクティブを獲得したことになる。もとより、ここでそのすべてを網羅することはできないが、以下、いくつかとりわけ難解と思われる記述を引いて解釈の視点を示して本稿をとじることにしよう。

2．ラカンにおける「現実的なもの」の諸位相

・「現実的なものはすべて、常に必ず、その場にあります」[S.V,38]

「現実的なもの」は、意識の外に排除されてなお、そこに存在し続ける。認識されない事柄に対する独断的な記述のように思われたラカンの言明は、しかしこれまでの議論を考えれば、フロイトの理論を忠実になぞったものであることがわかるだろう。「現実の痕跡」は「思考の痕跡」に覆われてなお、それ自身はそのままに残される。排除された「現実的なもの」は、「言語連合」の構造の外におかれるだけで、常に同じままに残されているのである。そうした「現実的なもの」の回帰が、主体の「不安」を引き起こし、強迫神経症などの原因となることが、精神分析が分析してみせた事柄のひとつであった。

・「それ（もの(Das Ding)）は、忘れ去ることが不可能な前歴史的大他者である」[S.VII, 87]

「もの」は、ラカンがセミネールの第7巻において、「そこにあるもの」でありながら、決して「再発見」されず、「失われたもの」としてのみ機能するものとして語られる。上にみたような「現実的なもの」の特徴を備えた「もの」の概念は、ここで「忘れ去ることが不可能な前歴史的大他者」と語られている。「忘れ去ることができない」のは、常に「そこにあり続ける」からであり、「前歴史的」といわれることも、これが「現実的なもの」の領域の事柄を記述するものであると考えれば、ある程度容易に意味を汲み取れる。すなわち、それは「言語連合」によって「歴史」が語られる手前にある「現実の痕跡」として、失われながらもなおそこに残り続けるものなのである。だが、それが「大他者」といわれるのは、どういうことなのか。その点を理解するためには、ラカンのフロイト草稿の読解にもう少しだけ立ち入って見る必要がある。

そもそも、ラカンは「もの（Das Ding）」というドイツ語の概念を、フロイトの草稿のある記述から導き出してきたのであった。フロイトによれば、心的組織のネットワークの形成途上にある幼児は、「隣人」を介して認識することを学ぶとされていた。「人間は認識することを同じ人間において学ぶ」が、その「人間」は、幼児にとって、想起によって自ら再構成し「理解」しうるものと、「もの」として「理解」の外で印象を与え続けるものに分けられる［cf. Freud:GW-Nb, 426］。ここでの「もの」とは、「理解」が成立する背後で覆われる「人間」そのもの、それによって主体が「認識すること」を学んだはずのものだとラカンは解する。「思考過程と関係するものすべてが主体の中で形作られるのは、話す主体としてのこの「隣人」を介してである」[S.VII, 50]。だが、それによって「認識」を学んだ「もの」は、認識の成立にあたって言語的な秩序によって被覆される。この、主体にとっての「最初の外部」となる「もの」は、それゆえ、主体の「満足の探求の目標」[S.VII, 65] としての位置をとることになるだろう。「もの」が「忘れ去ることが不可能な前歴史的大他者」といわれるのは、それが主体にとって認識することの意味を与える立場をとるからだといえる。「人間が原初的に無力であることが、あらゆる道徳的動機の究極的源泉である」[Freud:GW-Nb, 410f.] とフロイトがいっているように、「援助を受けざるを得ない」立場の幼児が出会う最初の「大他者」は、ラカンにおいても、ひとの「倫理」を規定する重要な役割を果たすと見なされるのである。

・「現実的父」について

こうした「大他者」の理解を踏まえることで、「現実的なもの」として語られる「父」の機能を理解することができる。

> 分析経験は我々に、男性の性的機能を引き受ける上で、現実的父の存在が本質的な役割を果たすことを教えています。去勢コンプレックスが主体によって本当に体験されるためには、現実的父が真にその役割を果たさなければなりません。[S.IV, 364]

ラカンはセミネール第四巻において、エディプス・コンプレックスを完成させる最後の重要な要素として「現実的な父」の機能をあげている。一読する限り、それは理想化された父に対する現実的な父を示すように理解される。「フロイトは現実的父も無視しません。〔中略〕神のような父ではないにせよ、少なくとも良き父がいることは望ましいことです。〔中略〕良き父とはある程度までぶざまで不完全な人物なのです」[S.VII, 213]。「現実的な父」は、いわば主体の目の前に実際に存在している父を意味するように理解されるのである。

しかしながら同時にそれはラカンにおいて、把握困難なものとして位置づけられる。「現実的父はまったく別物です。現実的父を把握することに、子どもは常に非常な困難を担ってきました。〔中略〕それは我々大人の誰にとっても同じことです。あらゆる分析経験の根底にあるのは、我々を取り巻く最も現実的なものである人間存在それ自体を把握することが、きわめて困難だということです」[S.IV, 220]。この後の意味での「現実」は、常に意識から逃れるところの現実、これまで本論で見てきたような「現実的なもの」の次元における「隣人」を示すものであるように理解できる。

この問題は、「現実的なもの」の領域における「大他者」の位置づけを考えることで理解することができるように思われる。「大他者」という概念はそもそも、ラカンにおいて、「シニフィアンの宝庫」に等しいものとみなされることが一般的であり、「現実的なもの」との関わりで語られることは少ないものであった。「大他者」とは、それによって指し示されるもの（シニフィエ）との連関をもたないままに連なる「シニフィアン連鎖」との出会いの「場」であり、主には「象徴的なもの」との関わりで論じられるのである。だが、「現実的な大他者」という表現は、ある場面においては、「大他者の大他者」のことを示す概念として用いられる[cf. S.XXIII, 134]。「大他者の大他者」とは、セミネール5巻を中心に展開されるグラフ論において、それが欠如していることを示すシニフィアン（S（Ⱥ））が獲得されることで主体のエディプス・コンプレックスを完成させるものとして位置づけられるのであった。「大他者の大他者は存在しない」ということを示すシニフィアンが欠如として「象徴的なもの」の秩序の中に位置づけられることで、象徴的な秩序が安定するといわれていたのだ。

この欠如として与えられる「大他者の大他者」こそが「現実的な大他者」、すなわち「現実的父」だとするならば、われわれはラカンの議論をある一貫したパースペクティブのもとで理解することができるようになるだろう。つまり、「我々をとりまく最も現実的なものである人間存在そのもの」としての「現実的父」とは、主体にとっての最初の「隣人」として「道徳の源泉」となるものであるが、それは「象徴的なもの」の秩序においては「欠如」としてしかあらわれない。現に現れているのは、「ぶざまで不完全な人物」としての「父」にすぎない。だが、不完全ながらもそこにいる人物が「父」として機能するのは、存在しない「大他者の大他者」を潜在的なもの（ポテンツ）としてそこに認めるからにほかならない。エディプス・コンプレックス形成後の安定した象徴的秩序に主体が参入することを可能にするのは、「ぶざまで不完全な父」がそれでもなお「現実的父」として現れ

るからと理解することができるのである。

以上、ラカンにおける「現実的なもの」について、とりわけ解釈が困難と思われるものを中心に解釈を試みた。ラカンにおける「現実的なもの」は、こうしてフロイトの草案の読解を基礎にすることで、理解の枠組みを得ることができるのである。

ラカンのセミネールについては、ジャック＝アラン・ミレール編集のSeuil版に従いローマ数字で巻号を示した。

その他、本稿で用いた文献の略号は次の通り

[Freud:GW-Nb] Sigmund Freud, *Gesammelte Werke*, Nachtragsband, Texte aus den Jahren 1885-1938, herausgegeben von Angela Richards unter Mitwirkung von Ilse Grubrich-Simitis, S.Fischer,Frankfurt am Main, 1987

[Hume] David Hume, *A Treatise of Human nature*, Oxford University Press, 2000

註

(1)「判断」をめぐるフロイトの議論が、「現実指標」と呼ばれるものをよりどころに展開するものであり、かつその「現実指標」がフロイトにおいて「ωニューロンの放散」すなわち「意識現象」との関係で定義づけられていたことからも、フロイトが「思考」を「無意識的なもの」と考えていたとは考えにくい。しかし、ラカンが指摘するように、「現実指標」の問題を別にすれば、「思考」もまた基本的には、心的装置のエネルギー制御の問題とみなしうる。